

谷川岳一ノ倉沢 烏帽子奥壁南陵



日時：2010年9月17日(夜)～19日

参加者：L金井良一、柴崎研一、杉本伸一(記)

コースタイム：

9月17日 横須賀 21:00-

9月18日 1:30 谷川岳ロープウェイ駐車場(仮眠) 5:00-6:00 一ノ倉沢出合

6:45 出合-8:00 ヒョウングリの滝 9:00-9:30 南稜テラス 10:30(登攀開始)

南稜登攀終了点 14:30-ヒョウングリの滝 19:00-20:30 一ノ倉沢出合 帰幕(泊)

9月19日 一ノ倉沢出合 9:00- 横須賀 帰着 16:00



僕にとっては、丹沢以外で初の登攀である。高度感に恐れを抱かないか、最後まで行けるだろうかと言う不安と、憧れの一ノ倉に行ける喜びが相まって胸が高鳴ているのが分かる。気持ちを抑えつつ、金井車にて横須賀を 21:00 に出発した。途中渋滞に遭うこともなく、順調に谷川岳ロープウェイ駐車場に 1:30 に到着した。

(テールリッジに行く金井)

軽く食事をし、仮眠をとる。翌朝 4:00 に起床し、朝食をとり 5:00 に暗い中を出発し、

一ノ倉を目指す。途中マチガ沢にて小休止。我々の他に登山者の姿が見えない。「今日は静かな登攀となるのだろうか」と話しながら 6:00 に出発到着。 幕営後、準備を済ませ 6:45 に出発を出発した。

出合を出てすぐ正面に、険しくそそり立つ垂壁が威圧している。沢を歩くが、緊張からか、どことなく心地無く感じる。この時、僕は一ノ倉の気に飲み込まれていたのかもしれない。

8:00 にヒョウングリの滝に到着。今までの静かさが嘘の様に、2 パーティが順番待ちをしていた。静かだったのは出遅れたから？などと冗談を言いつつ待つこと小一時間、ようやく我々の出番だ。金井が先頭で下降し、杉本が続く。緊張からか少々足が震えているが何とか下降終了。最後に柴崎が降りて、テールリッジに取り付く。



一枚岩のスラブを越えて、草付きにて小休止。正面に衝立岩が見える。垂壁というより覆い被さってきそうな気さえする。南陵テラスは、遙か彼方に見える。今日は天気が良く。最高の登攀日和であるが、とにかく暑い。この時点で早くもバテ気味だ。

烏帽子沢をトラバースして南陵テラス到着。テラスでも 2 パーティの順番待ち。ここで大休止とした。テラスに腰を下ろし、周りに目を遣ると、美しい一ノ倉の風景が目に飛び込んでくる。正面に出会駐車場が遙か眼下に見える。

左に目をやると変形チムニーを蝸牛のパーティが登っていた。待つこと 1 時間、我々の番だ。

(衝立岩をバックに休憩する柴崎(左)杉本(右))



10:30 1ピッチ(以下“P”と略す)目、金井リードでチムニー上まで行く。続いて柴崎、杉本が同時に登る。最初のフェースは、細かいがしっかりしたホールドが拾え、落ち着けば特に問題は無い。そして核心部？と思えるチムニー。最初の1歩が悪い。かぶり気味のチムニーを力尽くで、攀登るが、越えられない。

(1P目チムニーを抜けた杉本)

ザックが引っ掛かり登れない。「まずい」右側のフェースもかぶっていて無理。もう一度、力尽くで、引き上げる。なりも何もあつた物ではない。左肘をついて強引に越える。所要時間は 30 分。自分の力なさに呆れるやら、やるせないやらで、心も体もホキホキの 1P 目が終了。

次のフェースも、ホールド、スタンスとも豊富だが、細かくやや逆層気味。慎重に越える。緩い草付きで、ほっと気が緩んだ時にスリップした。草の下に岩が隠れていた。びっくりしたが、怪我はない。一ノ倉が僕に教えてくれた様だ。「油断するな！」と。



(馬の背リッジに行く柴崎(前)杉本(後))

腕がパンパンになってきた。無意識のうちに岩にしがみついていたのかもしれない。この凸角ではホールドが拾えない。焦る気持ちを抑えつつ、先輩達のアドバイスを思い出す。「ホールドは意外と近くにある」そうだと思い直し、探っていると凸角右下部にホールドを発見。これで越えられた。ここまで結構な時間が掛かっている。時間短縮を狙ったせいか、トップの金井が、凸角部から終了点まで一気に登って行く。足場の悪い所で確保して待つ。僕の足下は、剥がれそうな尖った岩である。足が痛くなってきたが、他に移る場所も無い。こんな経験が出来るのもホンチャンだからである。本当に有り難い。



(最後の垂壁を登る柴崎)

最後の垂壁を柴崎が登る。杉本も続く。最後の垂壁は、噂通りホールドが拾えない。最終点手前のヌンチャクに手を掛けてA0で乗り越える。最終点に手を伸ばすと、これまた噂通り右手にしっかりとしたホールドがあった。ほっとすると同時に「本当にあったんだ」と思えて笑いがこみ上げてきた。

終了点で大休止し。14:30 6ルンゼから下降開始。3P目の下降は、足でしっかり突っ張っていないと、岩の割れ目に入り込んで行く。4P目は、6ルンゼ側の切れ落ちた方側に体が持って行かれる。「やばい、戻れないかも」と思った瞬間。あれ？止まった？ピ〜ンと張ったザイルの先を見ると、支点に固定されている。「そっちに引っ張られると思って、バックアップ取ってたんだよ」と笑顔で金井が話す。さすがチーフリーダー、これも想定内の範囲内だった様である。恐れ入りました。(^^)

最後の懸垂では、テラスに降りずに、鎌形ハング下まで一気に降りた。ここで問題が起きた。ザイルが引っ掛かり回収できない。金井が登り返し回収に成功した。チムニーの反対側から登る新ルートである。ザイルを回収した頃には、辺りが薄暗くなってきた。

急いで降りるが、烏帽子沢のトラバースが滑る。所々湧き水がでており足場が悪い。

テールリッジ中間点で漆黒の闇が訪れた。ヘッドランプを点けて歩くが、これも初体験。足場を照らしても岩の段差の向きが分からない。時々滑ってしまう。頭を左右に振って影を確かめながら進む。水の音が大きくなってきた。ヒョウングリの滝まで戻ってきた。お釜で濁った喉を潤す。飲んでも、飲んでも止まらない。腹一杯水を飲んで、懸垂した地点を登る。ヘッドランプの灯りを頼りに、岩を登る。こんな体験も始めてだ。有り難いと思いつつも、周りが見えないので怖い。数回バランスを崩しそうになるが、なんとか持ちこたえられた。ザイル無しだから、落ちたら「さようなら」である。

登り切って小休止し、出合まで戻る。20:30 到着である。初のホンチャンにして、初の残業であった。金井、柴崎両先輩とガッチリ握手をし、無事終了となった。この時は、「やった」といった感覚ではなく、「終わった」という安堵感の様な物を感じていた。片付けを早々に終わらせ、お待ちかねのスペシャルディナーを頂く。ウズラの卵2個入りの中華丼である。

翌日は、山岳資料館に寄り、森田勝さんの展示物や、小西政継さん愛用の品々の展示を見学した。「政」と書いてあるミトンを見た時、感動のあまり目頭が熱くなるのを感じた。

僕にとって一ノ倉デビューとなった今回の山行では、多くの経験ができた。

基本的な技術の未熟さや、体力の面で大きな課題を残す結果となった。下山中に「まだ早かったのかな」と考えもした。しかし、記憶を辿り記録を纏めている今現在、もう一度、一ノ倉の岩壁を登りたくて仕方がない思いである。

また、あの急峻で威圧感のある岩壁に触れる機会が早く来ないかなと、想う今日この頃である。



(駐車場にて、金井(左)と柴崎(右))



(ヒョウングリの滝からテールリッジを見る)

以上